授乳期の子をもつ就労・就学中の女性たちの語り

藤田　藍津子*

Narratives of women in employment and education with breastfeeding children

Atsuko FUJITA

abstract

The aim of this study was to clarify, based on narratives on the act of breastfeeding, how women experience pregnancy, childbirth and child rearing while in employment or education. Interviews were conducted in 10 primiparous mothers with infants aged 5 months to 2 years; the women were breastfeeding while in employment or education, or had weaned 6 months earlier.

The interviews revealed qualitative changes in "the mind and body" during the transition process from being a member of society before pregnancy to the present. The experiences of these changes were chronologically focused on to extract 10 categories: (1) a lifestyle centered on work and school, (2) image of child rearing, (3) encounters, (4) joys, worries and anxiety, (5) confirmation, (6) reconstruction into a new "me", (7) finding significance in the act of breastfeeding, (8) acquiring a child-rearing style, (9) clarifying goals (reconfirmation), and (10) new worries. Among these 10 categories, the aspects of these women that changed over time were elucidated from the narratives, and three core categories were identified. These core categories, which corresponded to three different changes that occurred in the sphere of experiences spoken of by the women, comprised the narrator-centered "changes in connections with society and people", "changes in the content of worries including physical changes", and "changes in questions posed to oneself" on how to live from now on. Of these three changes, factors and turning points leading to self-reconstruction were discovered in the core category of "changes in questions posed to oneself".

Key words: women in employment and education, breastfeeding, sphere of experiences, reconstruction

Ⅰ.問題の所在と研究目的

1．乳幼児の子育て中女性の社会進出

近年，働く女性の増加や女性の社会進出により，女性にとって子どもをもつことの意味，母親として女性としての自己実現を目指す女性の姿が取り上げられるようになってきた(柏木，2001).

キーワード：就労・就学中の女性，母乳育児，経験世界，再構成

＊ 帝京科学大学　医療科学部　看護学科

柏木(1999)は，子どもの価値と社会経済的状況において，子どもを“授かる”から“つくる”時代となり，女性の高学歴化と子育ての意味の変容，女性の有職化と家族の中の個人化について研究している．

その中で子どもを産むことは，女性の人生のオプションの1つとなったと述べており，女性が仕事や学業を続け，自己実現を目指しながら子育てを行うことが普通の時代となったのである．女性の就労状況では，出生1年前に就労していた女性のうち，出生後1年半後には約3割近くの女性の就労が報告されている(厚生労働省大臣官房統計情報部，2005)．このように女性の高学歴化と日本経済の社会的背景により，乳幼児の子どもをもちながら就労・就学する女性はさらに増えることは予測される．

このような時代，子育て中の女性にとって，仕事や学業と子育ての両立に負担を感じて，ストレスフル状態やうつ状態になる場合があるだろう．乳幼児にとってそうした環境は，人として成長するうえで絶対的安心感や信頼感(南部，1989)，他者と関わることの喜びといった体験を希薄にしていく恐れがある．

2．日本の母乳育児の背景

1)女性の社会進出と母乳育児

1960年代の7割前後だった母乳哺育率は，1970年代には人工乳の普及により20%台にまで低下し，その後，国をあげての母乳育児推進により徐々に回復しつつあるが，1997年の報告によると40%台の段階に止まっている(岡村，2002)．日本では，1974年のWHOに母乳保育推進決議を受け，当時厚生省が母乳育児推進の方針を打ち出し，80年代にかけて母乳育児率の回復・上昇傾向が見られた(厚生省家庭児童局，1995)．2000年に入ると母子保健の国民運動計画として「健やか親子21」の中で，子どもの安らかな発達の促進と育児不安の軽減の中において，母乳育児の増加を目標値としてあげている(国民衛生の動向，2008)．母乳育児が上昇する一方，金子(1995)は，母乳哺育観に及ぼす社会的要因を明らかにし，女性の就労継続と母乳哺育については，育児休業や乳幼児の集団保育など，乳幼児の養育と就労のあり方の検討が重要な課題となっていると述べている．

統計上では約3ヶ月健診時では約50%の母親が母乳育児(母子保健事業団，2003)をしており，石井 (2003)によると，9ヶ月児のいる母親135名を対象による調査では，何らかの形で54．8%の母親が母乳育児で育てていたと報告されている．

2)心の栄養品としての母乳育児

南部(1989)は心の栄養品としての母乳(出なくても)を位置づけており，母子ともに納得するまで母乳を与える自然卒乳を提唱している．子どもは6ヶ月ごろから社会性が芽生え周囲に好奇心を覚え，その刺激に不安を覚えて母親の傍へ戻ってくる．その不安を解消する存在として母乳を位置づけている．

現代社会において，就労・就学をする母親たちにとって母乳育児を行うことは難しい反面，心理的側面から問うと，母乳育児には絶対的安心感と信頼感があるとされている．

3．授乳期の子を育てながらの就労・就学する女性たちの心と体

就労・就学する女性たちが産後に社会へ戻る際に問題の一つにあがるのが，母乳で育ててきた母親たちにとって，このまま母乳で育てるべきか，人工乳に切り換えるべきかがある(堤，2008)．現在，国をあげて母乳育児を推進しているが，一つの要因として，断乳のきっかけが仕事復帰であることがあげられる．また，0歳児保育では，冷凍母乳扱いやお昼休みに授乳を行いに行くことが出来るようになってはきているが実施されている場所は少なく(金子，1995)，母親への体の負担も大きい．一部の保育所では，人工乳が飲めるようになってから通所するようにと提示したり，保育所側の意向で断乳へと導かれたりするケースもある．社会へ戻った母親たちに，個別のケアが提供されることは，自ら専門の場へ出向く以外は，ほとんどといってまずない．

働く女性の母乳育児の実態(安藤ら，2002)によると，授乳中の子をもつ98名の女性にアンケート調査を実施した結果では，仕事を行いながらの母乳育児の継続は，勤務先の近くに託児施設があり，勤務時間中

に授乳ができるなどの環境が整っていないと無理であると結論づけている．また，回答者の多くは母乳育児を希望しているが，授乳が出来なくて母乳が止まった，断乳をして人工乳に切り替えた，最初から混合栄養にしたなどと回答している．安藤ら(2002)は，出産に関わる専門家の役割として，職場の改善も必要だが，母子の関係を良好に保つために，母も子も納得した授乳ができるよう指導する必要があるという．母親たちは妊娠中には母親学級，出産後は健診や育児教室など，集団で母親たちが指導や教育を受けることはあっても，個としてケアを受ける場は少ないのが現状である．新生児訪問や乳幼児健診の中で行政職員の判断によって個別のケースへとつながる場合を除いては，自ら声を上げて相談の場へ行かなければ母親が個としてケアが受けられる場はない．「社会全体で子育てを」と行政が謳う中，地域に暮らす母親たち自身の声はどこかで受け止められているのだろうか．地域社会を形成する個人一人ひとりにはそれぞれの人生があり，そこには生きてきた・生きている文脈が流れている．徳田(2004)は，人生という文脈を時間的広がりの中で，子育て期の女性の意味づけの特徴を語りから検討し，母親になるという人生の局面において，自己の変容を肯定的なものとして受け入れることが最も重要な課題となる可能性を示唆している．

石井(2003)は，9ヶ月児のいる母親135名を対象にした調査を行い，母乳育児を行っている母親は人工乳のみで育てている母親よりも，疲労感や睡眠不足の割合が高いことを明らかにしている．しかし一方では，母乳育児には体力が必要なことと同時に，林田ら(2000)によると，母乳育児を行っている母親は人工乳のみで育てている母親よりもQOL(生活の質)が高いことを170名への母親たちへの質問紙調査によって明らかにした．母乳育児の利点の一つとして母子相互作用を上げており，授乳期のQOLを高くするためにも，母乳育児の確立は重要と述べている．

4．本研究の目的

授乳期の子を育てながら就労・就学をする女性の心的体験プロセスを明らかにする．

Ⅱ．研究の方法

対象：乳幼児(生後5ヶ月～2歳) の第1子をもち，就労・就学をしながら母乳育児を行っている，もしくは半年前に卒乳した母親たち10名である．対象者(属性：表1)は26歳～37歳(平均31歳)で，子どもの年齢は生後3ヶ月～2歳8ヶ月(平均1歳4ヶ月)であった．

表1：対象者の属性(子どもの月例順)

	母親年齢	子ども年齢	就労・就学状況	家族構成
A	30代前半	3ヶ月	教員職(非常勤) 博士課程在学中	夫，子ども3人暮らし
B	20代後半	5ヶ月	医療職(育休中) 修士課程在学中	3世代家族
C	30代後半	8ヶ月	研究職(非常勤)	夫，子ども3人暮らし
D	30代後半	1歳	事務職(非常勤) 専門学校生	夫，子ども3人暮らし
E	20代後半	1歳7ヶ月	修士課程在学中	子ども2人暮らし　夫海外在住
F	20代後半	1歳7ヶ月	学部生	子ども2人暮らし　夫海外在住
G	20代後半	1歳7ヶ月	医療職(常勤)	3世代家族
H	20代後半	2歳	医療職(常勤)	夫，子ども3人暮らし母親実家近隣
I	30代後半	2歳	事務職(常勤)	夫，子ども3人暮らし母親実家近隣
J	20代後半	2歳8ヶ月	事務職（非常勤）	4世代家族

方法：インタビューの方法は，半構造化面接 (やまだ,2007)を採用した．インタビューの際にインタビューシート(表 2) を用いた．実施回数は各 1 回，実施時間は 1 人あたり約 1 時間であった．対象者は，筆者が当時所属する大学内の保育所にて，研究協力者を募った．また，筆者が卒業した学部の研究室を通して研究協力者を募った．インタビューは対象者から承諾を得た上ですべて録音し，録音記録を逐語録におこしして精読した．分析は，「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」(木下，2007)に基づいてすすめた．女性たちの語りごとに，就労・就学をしながら母乳育児を行っている・行っていた女性・母親たちが体験している変化，および変化のきっかとなった転機について語られた部分を，文脈に留意しながら分析を行った．

分析手順は，以下の通りである．

①分析テーマと分析焦点者に照らして，データの関連個所に着目し，それを一つの具体例(ヴァリエーション)とし，かつ，他の類似具体例をも説明できると考えられる，説明概念を生成した．

②概念をつくる際に，分析ワークシートを作成し，概念名，定義，最初の具体例などを記入した．

③データ分析を進める中で，新たな概念を生成し，分析ワークシートは個々の概念ごとに作成した．

④同時並行で，他の具体例をデータから探し，ワークシートのヴァリエーション欄に追加記入した．具体例が豊富にでてこなければ，その概念は有効でないと判断した．

⑤生成した概念の完成度は，スーパバイズによる助言を受け，類似が恣意的に偏よる危険を防いだ．その結果をワークシートの理論的メモ欄に記入していった．

⑥次に，生成した概念と他の概念ごとに検討し，関係図にした．

⑦複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し，カテゴリー相互の関係からさらにコアカテゴリーを作成し，分析結果をまとめ，その概念を簡潔に文章化し，結果図を作成した．

インタビューシートは、表 2 の通り．

表 **2**：インタビューシート

1. 氏名　2. 年齢　3. 職業・学業 4. 居住地　5. 学歴

(出産まで)

6. 学生時代
7. 妊娠前は母親になることへのようなイメージ
8. 妊娠がわかったときの気持ち
9. 出産場所とその場所を選んだ理由

(出産後)

10. 出産体験，初めてわが子に対面したとき，初めておっぱいを吸ってくれたときの気持ち
11. 産後のケアの内容，そのケアに対しての満足度
12. 産後の生活と協力者自身の心と体の変化
13. なぜ母乳育児を選び，続けているのか，母乳トラブル時の対処方法
14. 母乳の悩みのない人はなぜないのか

(社会復帰)

15. 社会復帰することへの思い
16. 母乳育児を続けることへの思い，不安，辛さ，喜び
17. 母乳をやめることについて
18. 母乳育児を続けるにあたって，期待すること・支援として望むもの
19. 母乳をあげることの意味

Ⅲ．結果と考察

1）抽出されたカテゴリー，概念

インタビューから3つの時間軸に沿って見いだされた10のカテゴリーと17の概念をまとめたものが表3である．

表3：抽出されたカテゴリー，概念

時間軸	概念	カテゴリー
社会人(妊娠前)	(1)仕事・学業中心の生活スタイル	【目標のある生き方】
	(2)子育てへのイメージ	【イメージの中での母親像】
妊娠→出産→産後 (社会復帰するまで)	(3)出会う	【お産と母乳育児中心の母親学級】 【変化する周辺世界】 【わが子との感動の出会い】 【ロールモデルと出会う】
	(4)喜び・悩み・不安	【喜びと不安が交錯する妊娠】 【産後の気分変動（喜びと不安定感）】 【ケアを求める気持ち】 【戸惑いの子育て】
	(5)確認	【居場所を見つける】
	(6)再構成　新たな「わたし」	【揺れる自己】
社会生活	(7)母乳を与えることの意味生成	【母乳育児による身体的負担】 【母としての確認行為】
	(8)育児スタイルの獲得	【社会とのつながり】
	(9)目標の明確化（再認識）	【母となっても自分らしく生きる】
	(10) 新たな悩み	【信頼できる専門家からの支援】

以下において，3つの時間軸に沿って、インタビュー語られたそれぞれの概念とカテゴリーの例を「　」で示していきたい．

時間軸：社会人(妊娠前)

(1)仕事・学業中心の生活スタイルのカテゴリーは，【目標のある生き方】の概念で構成され，目標をもって働く，経済的理由で働く，進学することの決意，専門職(研究者)として生きる，キャリアアップのための転職，将来を見据えた学生時代である．

これについて、F氏は，「学生生活は実習やボランティア活動など，多忙な日々でした．しかし，学生時代に出会ったボランティア活動すればするほど，出会いが広がりたくさんの価値観に出会えることの面白さを感じたり，有意義な学生生活を送っていました．その後，地域に関わる仕事がしたいと思い就職しました．」と語り，J氏は，「高校のときに部活動で少年犯罪とか，そういうのを研究して，少年犯罪を勉強してたら，なんか家族の問題とかいろいろあることを知って，そういうのを大学でもしていきたいなと思って，家族者社会学について学べる大学に進学しました．」と語っていた．

(2)子育てへのイメージのカテゴリーは，【イメージの中での母親像】の概念で構成され，大変なこと，自

分の時間が減る，幸せなこと，育児ノイローゼ，女性なら一度は経験したいこととイメージしている段階である．

C氏は，「子どもを産むと，自分の時間が削られてしまい，自由に自分のことができないのだろうって．でも女なら一度は産みたいなぁと思ってました．」と語り，I氏は「よく産後に育児ノイローゼとかになるとか書いてあるじゃないですか，育児書とか．だからそういう精神的な変化とかももっとあるのかなとか，育児がすごく大変だったりするのかなとかは思っていました．」と語っていた．

時間軸：妊娠→出産→産後(社会復帰するまで)

(3)出会うのカテゴリーは，【お産と母乳育児中心の母親学級】【変化する周辺世界】【わが子との感動の出会い】【ロールモデルと出会う】の４つの概念から構成される．【お産と母乳育児中心の母親学級】は，妊娠した女性たちは，市町村や医療機関が母子保健法によって定められているは母親学級に参加する．母親学級は妊娠中の過ごし方，母乳育児の利点，お産の様子が説明され，安心してお産にのぞめるように構成されている．しかし実情は，行政，医療機関の母乳推進，他の妊婦との出会い，お産の話，対象者とのニーズのズレ，行政，医療機関の一方通行であった．

D氏は，「区と病院の母親学級に参加しました．今は (出産後) 育児はこんなにも大変なのかと思いますが，そんなこと誰も教えてくれませんでした．夜におっぱいで起きることも知りませんでした．母乳育児とお産や陣痛の話ばかりで，知っておくべきことは教えてもらっていないように思います．」と語っていた．

【変化する周辺世界】は，職場・学校内での人間関係，指導教員との関係，上司との関係，親との関係，夫婦関係，地域とのかかわり，医療機関への受診へと周辺世界が変化する段階である．

J氏は，「結婚前に妊娠して，産むことがいいのか，産まないことがいいのかこれからの自分にとってどちらがよいのか迷っていました．妊娠して１週間で答えを出すように産婦人科の医師に言われ，自分の親には一度は反対されました．元々，「妊娠したら何があっても産もう．」と何となく自分の考えが決まっていたので，産みたい意志が強かったです．相手も産んでほしいという気持ちだったから，どうなるか分からない(自分の両親や親族を説得しなければいけないこと等)けど，縁があって授かった命なので，産むことを決めました．妊娠検査薬で初めて妊娠反応が出た時は，自分の中にもう一つの命があることに不思議な感じで，うわーー！！という気持ちでした．女性として嬉しかったです．」と語っていた．

【わが子との感動の出会い】は，感謝，守っていきたい，感動，言葉では語れない出会いの段階である．

H氏は，「人生いろんなことがあって，妊娠中もいろんなことがあったけど，出会えたことに感謝の一言でした．」と語っていた．

【ロールモデルと出会う】は，職場，学校内での人間関係，指導教員との関係，身近にいる目指す姿，共感，安心を得る時期である．

C氏は，「働くのが決まったのが，２か３月で，４月に妊娠していることが分かったの．でも，「あらあらいいわよ．どうぞ安心して出産して．」って研究室の人たちに言われて，産後は生後６ヵ月までお休みしたんです．研究室には私のように子育て中の人もいて，安心して過ごせました．」と語っていた．

(4)喜び・悩み・不安 は，【喜びと不安が交錯する妊娠】【産後の気分変動 (喜びと不安定感) 】【ケアを求める気持ち】【戸惑いの子育て】の４つの概念から構成されている．【喜びと不安が交錯する妊娠】は，喜び，急激な不安，喜びよりも現実問題，周囲との関係が変化する段階である．

E氏は，「素直に言うと喜び半分，不安半分．私は子どもが昔は苦手でした．」と語っていた．

【産後の気分変動 (喜びと不安感) 】は，感動のお産の後に待っているのは，新しい家族との生活である．産後は子どもと密着した時間を過ごしながら，その後に社会へ戻ることも考えながらの生活が始まっていく時期である．

D氏は，「みんなはどうしてるんだろう…．私は働いていた期間が長かったから，いわゆるわがままなのでしょうか．子どもに合わせるっていうのがむずかしくて，イライラしちゃうことがありますね．男の人っていいよなって，結局は私が何でもしないといけないんじゃんって思っちゃいますね．」と語っていた．

【ケアを求める気持ち】は，母乳育児への不安，1人で悩み，育児への現実感覚の湧かなさ，信頼できる専門家との出会う時期である．

E氏は，「今思えば，出産は何とかしてくれるじゃないですか，医療が．育児は誰も助けてくれないですよね．正直いって，あんまり母乳っていうものがよくわかってなかったっていうか，やっぱりどういうふうにおっぱいが出るかとか，本で読んでてもあんまりよくわかんなくて，出産してもすぐは出なくて，1日ちょっとしてからでました．最初は何か吸ってても，こっちもおっぱい出てる感覚も全くないし，こんな吸わせててどうなるのかなっていう思いでした．」と語っていた．

【戸惑いの子育て】は，栄養方法への悩み，育児への自信の持てなさ，誰かに聴いてもらいたいと，戸惑う時期である．

F氏は，「産後に大変だなって思ったのは，リズムが掴めるまでですね．あんまり，うちの子は多分手かからない子だとは思うんです．1人で目覚まして，起きて，フンガフンガしてて，フンガフンガしてるのをわたしが「えっ．」って気づいて，飛び起きて，ああ，おっぱいほしかったのねっていうような感じだったんですけど．最初そのへんのリズムがうまく掴めなかったです．気が張ってるからあんまり寝不足は感じなかったんですけど，精神的に疲れるというか，ほんとに子どもとべったりになっちゃっていました．どうやって自分で気を抜いたらいいのか，最初に掴めるまでは大変でした．」と語っていた．

(5)確認 は，【居場所を見つける】の概念から構成されている．【居場所を見つける】は，家の外へ出たり，女性自身の専門性を生かすことを考えあり，ママ友との出会う時期である．

J氏は，「自分もなんか外に出たかったのもあるけど，ほかのお母さんどんな子育てしているのか知りたかったですね．他の子どもも見られるものあるし，自分のためにもなるので．そんな感じでいいかなあと思えるようになって，仕事に出たんです．」と語っていた．

(6)再構成　新たな「わたし」は【揺れる自己】の概念から構成されている．【揺れる自己】は，社会復帰へ戸惑う時期である．

H氏は，「出産をしたら何もかも吹っ飛んで，もうこれは戻れないなっていうのがあって，初めに産まれて1か月の間とかは，もう半ばやめることを (大学院) 自分の中で決めていました．大学院の先生方に辞めることを相談したら「なんかできる方法はないの？」「それは環境次第ね．」「できる方法探そう！」みたいな感じで言って下さいました．すごい周りのサポートがすごい大きくて，でも子どもを連れて勉強するっていうのはなかなか無理だなって思ってました．でも今もお義母さんとかお義父さんとかは，「H(子ども)がかわいそう．」と言って，大学院自体は多分賛成はしてないですね．大学院から帰ってくるたびに「きつかったね．」ってHに対して言うときがあって・・・．1回言われたのが，「お母さん道楽につきあわせて・・・．」みたいなことは言われたんですよ．(中略)今は社協(社会福祉協議会)の子育てサポートの託児制度があって，半分ボランティアで時給600円で預かってくれるので助かっています．そういう制度があって，この子もまだ人見知りしないし，預けられるっていう環境が整ったから，「もう，やっぱやめません．」みたいな感じになりました．でも，やっぱり息詰まると，これは来年行けるのかなとか，そういう不安は常に抱えています．でもここまできたら卒業しないと今までのは何だったのってなるなって思います．辞めたら多分後悔しそうな気がします．」

時間軸：社会生活

(7)母乳を与えることの意味生成は，【母乳育児による身体的負担】【母としての確認行為】の２つの概念から構成されている．【母乳育児による身体的負担】は，寝不足，集中力低下，腱鞘炎の治りにくさ，風邪を引きやすさ，痛みを伴う張り，乳腺炎，辛い搾乳，冷凍母乳，保育環境への不満といった身体的な負担が表出される時期である．

Ａ氏は，「今辛いのは夜寝れないことです．これが今一番きつい．眠れないとうことがいかに人間の精神に影響を及ぼすか，よく分かるようになりましたね．本当に日中眠くて頭が働かないです．それに，おっぱいが張るでしょ，痛くて痛くて集中できない．搾乳も痛いし，よくわかんない，今はやめることは考えてないですね．この時期って今しかないですよね．チューチューって吸ってくれることなんてないでしょ．」と語っていた．

【母としての確認行為】は，母乳育児を続けることの幸せ，子どもが安心できる場所，人間の基本，肌と肌のふれあい，大切な２人だけの時間，喜び，決してこだわらないとする時期である．

Ｄ氏は，「おっぱいをあげることは，私とK(子ども)のコミュニケーションですね．母親としておっぱいあげてると「ああ，母親なんだ」と思えます．なんか最近Kに，「Kはね，いっぱいご飯も食べれるようになったし，おっぱいバイバイしてみる」って聞いたら，もうこんな顔するんです（手で泣いた顔を表現する）．かわいい．おっぱいは今はまだ必要なものなのでしょうね．」と語っていた．

(8)育児スタイルの獲得 は，【社会とのつながり】から構成されている．【社会とのつながり】は，居場所の獲得，一個人として生きる，ママ友との関係，保育所との関係へとつながる段階である．

Ｈ氏は「おっぱいを仕事に行く前にいっぱい飲ませて，帰ってまたがぶがぶ飲ませれば，それでおっぱいは大丈夫でした．仕事をすることは，自分の願いでした．」と語っていた．

(9)目標の明確化(再認識)は，【母となっても自分らしく生きる】から構成されている．【母となっても自分らしく生きる】は，自らの専門性を生かす，目標をあきらめない，育児と両立できる方法を見つける時期である．

Ａ氏は，「例：昔からずっと，子ども産む前から考えていたのは，自分でも生活能力があったほうがいいと思ってました．というのは，やっぱり研究好きだからというのもあるのかな．子どもと24時間，子どもが嫌いなわけではなくて，むしろ大好きだけれどもべったりだと，もう，それしか見えなくなっちゃいそうで，それがちょっと怖いです．でも，一番は多分自活の能力がほしいですね．今は手を抜いてますね．研究のほうをですね．」と語っていた．

(10)新たな悩みは，【信頼できる専門家からの支援】から構成されている．【信頼できる専門家からの支援】は，肯定的なかかわり，信頼の出来る専門家，身近な存在，専門的なアドバイス，ただ聴いてもらいたいと願う時期である．

Ｊ氏は，「家族が多かったし，自分の時間が欲しかった．助産師さんに母乳のこと相談して，いっぱい，好きなだけ飲ませていいっていうのもあったから，それでいいのかなあっていうのはあった．仕事始めても，朝は忙しいときに「５分だけね」って言ってやるのも，初めはどうかなと思ったけど，まあ，５分って，子どもが何度か繰り返すうちに，このくらいの感覚っていう，身につけばいいかなと思って，それがいいのか分からんでやってたけど・・・．助産師さんに聞いたら「それで，ああ，それでいいよ，いいよ」みたいな感じだったから，「ああ，それでいいんだあ」と思って自信が持てた．「ああ，自分がやっていることは間違ってなかったんだなあ」っていうのが何となく分かって，あんまり不安にならずにこれたかなぁ」と語っていた．

以上にみてきたような、3つの時間軸における授乳期の子を育てながら就労・就学をする女性の心的体験プロセスは，図1のように，時間経過と共にカテゴリー間を行き来しながら，自らを再構成していく過程であるとまとめることができる．

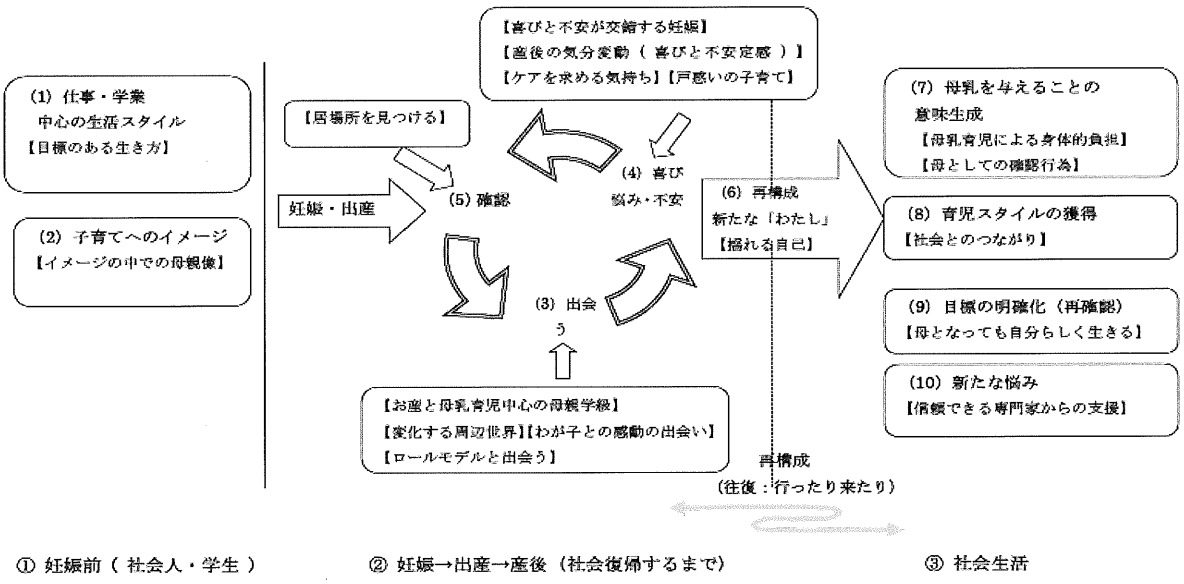

図1　授乳期の子を育てながら就労・就学をする女性の心的体験プロセス

2) 抽出されたコアカテゴリーと，女性として変化していく過程の相互の関連

10のカテゴリーからは3つのコアカテゴリーが生成された．3つのコアカテゴリーとは，授乳期の子を育てながら就労・就学をする女性の心的体験プロセス中で起こった3つの変化であった．具体的に時間と共に語りの中で変化したものは，「社会や人とのつながりの変化」「身体的変化も含む悩みの内容の変化」そしてこれからどう生きるかという女性自身の「自己への問いの変化」であった．語られた女性たちの心的体験プロセスは，自己実現へ向かう自分自身への語りであった．変化の内容において，「社会や人とのつながりの変化」「身体的変化も含む悩みの内容の変化」は，妊娠・出産と共に生じる現象であり，地域のケアのあり方や専門家や保育施設のあり方について問われるべきであり，この変化のあり方が3つ目の変化である女性自身の「自己への問いへの変化」へもつながっていくのである．

コアカテゴリーの3つの変化とは，まず「社会や人とのつながりの変化」がある．つながりの変化は，妊娠前では，働くこと，妊娠すること，母親になることが個人や夫婦間での話題や関心ごとであったものが，妊娠が分かったことによって，職場，学校との関係性の中での妊婦生活となる．妊娠中は，医療機関や助産院への受診があり，医師や助産師との関係が生まれる．妊娠という母親になる第1歩目に，どのようにして信頼の出来る専門家と出会うかが安心してお産へ迎えるかの一つの要因である．また，職場，学校での理解の程度やロールモデルの存在が，安心して妊娠生活を送れるかの要因でもあることがわかる．さらに，妊婦たちは母親学級への参加をし，行政へのつながりをもち始める．女性のライフデザインを考えると，就労・就学しながら妊娠をした女性にとって，行政とつながるということは，初めての経験のこととなる．行政機関に何かしらの申請をすることはあっても，つながりとしての関係性が生まれるのは妊娠してからである．この関係性をいかに活用し，どのように築いていくのかがその後の母親としての生活のありかたと関わってくるようである．母親学級という機会を妊婦も，行政側も大切にしなければならない場であるといえるだろう．出産後は，実家の距離や実家で過ごしているかいないかに関わらず，5名の

女性が孤独感や閉塞感について語っていた．女性は出産後に子どもと密着した生活になり，社会とのつながりが断たれてしまったかのように考えがちな状態にあるといえる．孤独感や閉塞感のある状態からまた社会とのつながりを見つけようと動き出すことは勇気のいることなのかもしれない．子どものいる生活に戸惑いながらも慣れ始めると，社会復帰について考え始めたり，ママ友をも見つけたりと新たな関係が生まれる．その後，社会復帰をすると保育所との関係や子どもを通しての家族との関係が生じる．また，産後の母親の体調管理や乳幼児健診で，医療機関や行政との関係もあり，産後の精神的に敏感な状態にいる母親にとっては専門機関での専門家とどのように出会うかが母親のメンタル安定感と大きくつながることも語りによって明らかとなった．

妊娠した女性たちが環境や専門家たちとの出会いの意味をどのように解釈すべきか．高齢者の生活において外出がもつ意味と価値について研究している松本 (2005)は，高齢者の生活において外出することの意味と価値とは，「今ここ」の体験を理解し，「今ここ」の出会いを取り巻く機制として，「包合」という言葉を用いて説明づけている．見たり，聞いたり，感じたりする行為／体験が連なっていく様態を「出会い」の連続として定義している．語り手の女性たちが，母としての自己と，個人としての自己を再構成されていくにあたり，確認の連続があり，その中には出会いの連続も含まれている．この現象を，子育て支援の専門家は，不安や葛藤のあった過去と，自己実現を目指す未来をつなぐ現象が「今ここ」の「出会い」あると理解し，母親たちが資源や人と，そして将来の「私」へとつながっていける支援をしなければならないのである．

2つ目の変化である「身体的変化も含む悩みの内容の変化」では，妊娠中は職場，学校との関係で，他の人たちに迷惑をかけてしまうのではないのかという，関係性の中での悩みがあり，出産後から社会復帰するまでの生活では，家庭の中で孤独感や閉塞感，育児ストレス，子どものことで専門的なアドバイスが欲しいときがあることがわかった．家族関係の悩み，栄養方法へ迷いや悩み，母乳トラブルも生じていた．社会復帰後は，母乳トラブル，保育所との関係や，このまま仕事，学業をつづけるべきかの迷いが生じることが明らかとなった．

3つ目の変化である女性自身の「自己への問いの変化」は，社会や家族とどうつながりながら，社会復帰をし，母となっても自分らしく生きる方法を模索するのかが自己の問いへの変化であった．

3)変化の始まりとしての再構成

抽出された概念の中に「再構成」がある．この概念は授乳期の子を育てながら就労・就学をする女性の心的体験プロセスにおいて流動的であり，図1にあるように，時間軸の中を行き来している．「再構成」されていく意味をどのように解釈するのかで，対象者の解釈の仕方が変わるであろう．心理学者ヴィゴツキーの研究者である高木 (2001) は，ヴィゴツキーの「破壊と崩れ」について，再構成理論を次のように説明する．「身体の崩れの場は事物の消滅ではなく，生成運動を意味する．崩れにおいて世界と身体があいまいに交じり合う，そうした場所から新しい出来事が発生するのである．(中略) 「閉じた身体」と「外側の世界」ではなく，崩れつつある先端部，表面の生成の現場，発達の時間が発生する現場を凝視すること．」この内容には，母子に関わる専門家が隠されている．母親たちの葛藤，揺れ動く心理模様，何ともいえない感情の変動．それは，今までの自分が壊れたり，あきらめたりすることではなく，次の新しい現象への始まりなのである．母となった女性と関わるとき，この現象を汲み取らなければならないのである．そして，その現象を母親たちが体感し，新たに次を派生させていくこと，不安や悩みに対して納得して筋道をつけて，また次に向かっていくことが，語り手たちの語られた経験世界に生じていた「再構成」なのである．この一人ひとりの「再構成」の意味合いを解釈する力が，母子に関わる者たちの専門性として備えられるべきであると考える．

4)「確認し合う」という，母親たちへの支援

子どものいる生活は明るくて，幸せいっぱいに描かれがちである．語り手の彼女たちは，時折語りの中で揺れながらも，その自分を統合しながらまた更に新たな目標に向かっていた．そして，また崩れることがあっても立て直したり，誰かに寄りかかったりしながら語り手なりの方法で行き方を模索していた．喜び・悩み・不安→出会い→確認のこの連続こそが重要であり，この揺れる「わたし」を確認し，悩み・不安を減らすことではなく，どう対処し，どう向き合っていくかを模索できる環境があること，さらには解決できるものは解決策を知ることが必要なのである．女性たちの自己はうごめきながら作られ，また揺れているのである．

揺れる「わたし」を確認できるとは，どのような意味か．渡辺 (2006) は，母子を支える専門家の役割を共に確認しあうことと述べている．母親たちにとって共に確認してくれる人の存在と環境が，これからの新たな「わたし」を再構成し，新たな自分を形作っていくことへの重要な存在となる．それぞれが生きている文脈をゆっくりと受け入れながら，共に確認しあう作業こそがこの現代の母親支援には必要であると考える．

Ⅳ．総合考察

語りの分析において，女性たちの授乳期の子を育てながら就労・就学をする女性の心的体験プロセスが明らかにされた．授乳期の子を育てながら就労・就学をする女性の心的体験プロセスには，10のカテゴリーと17の概念が抽出され，3つのコアカテゴリーが生成された．3つのコアカテゴリーとは，「社会や人とのつながりの変化」「身体的変化も含む悩みの内容の変化」そしてこれからどう生きるかという女性自身の「自己への問いの変化」であった．語られた女性たちの経験世界は，自己実現へ向かう自分自身への語りであった．変化の内容において，「社会や人とのつながりの変化」「身体的変化も含む悩みの内容の変化」は，妊娠・出産と共に生じる現象であり，地域のケアのあり方や専門家や保育施設のあり方について問われるべきであり，この変化のあり方が3つ目の変化である女性自身の「自己への問への変化」へもつながっていくのである．

Ⅴ．研究の限界と課題

女性たちの語りは現在から過去の見方，過去と捉えなおしが組み込まれながら語られている．本研究では，対象者が10名のインタビューであり，語りの一般化は出来ず，示した結果は一つの見方にしか過ぎない．現場での活用に関しては，研究と実践を重ねることで検証される必要がある．今後は対象の時間経過を長期的にたどり，母乳育児に留まらず就労・就学しながら子育てをする女性全般に範囲を広げる必要がある．

謝辞

本研究は，語り手10名の女性たちと共に語り合う関係の中で進めてきました．プライベートな事柄を快く語ってくださった女性たちに，心よりお礼申し上げます．

引用文献

安藤優子・滝本律子・渡辺知美(2002).働く女性の母乳育児実態－今後の保健指導を考える－
茨城県母性衛生学会，**22**，41-45.

母子衛生研究会編(2003).母子保健の主たる統計　母子保健事業団

平山順子(1999).育児期における専業主婦の個人化欲求－経済的資源へのアクセス志向と関連を中心に－
発達研究, **14**, 62-77.

今村栄一(1987) .わが国の離乳の歴史的経過　小児科診療, **49**, 1408-1412.
石井美里(2003).生後 9 ヶ月までの母乳栄養継続状況の調査　東海大学保健科学部紀要, **9**, 51-56.
金子省子(1995). 授乳の実態と母親の母乳哺育観に及ぼす社会的要因の影響　日本家政学会誌, **46**, 941-949.
柏木惠子(1999).女性における子どもの価値－今，なぜ子を産むのか－　教育心理学研究, **47**, 170-179.
柏木恵子(2001).子どもという価値　岩波書店.
木下康二(2007).グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い　弘文堂.
国民衛生の動向(2008). 母子保健　厚生統計協会,**9**,95-103.
厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態保健統計課(2005).「出生前後の就業変化に関する統計」の概況－人口動態統計特殊報告－　厚生の指標, **52**, 43-52.
松本光太郎(2005).　高齢者の生活において外出がもつ意味と価値:在宅高齢者の外出に同行して 発達心理学研究, **16**, 265-275.
南部春生 (1989).　心理面からみた母乳栄養　小児医学, **22**, 918-936.
南部春生･大田八千雄・服部哲夫・三浦正次(1996).離乳と断乳「自然卒乳の提唱」 周産期医学, **26**, 525-530.
日本母乳の会運営委員会(1999) . WHO 共同声明. 母乳育児成功のために;産科医療施設の特別な役割
岡村博行(2002).母性を育む:ソフロロジー式出産と母乳育児　日本評論社.
佐藤浩一(2004) .心理学辞典(p.288)有斐閣.
高木光太郎(2001).ヴィゴツキーの方法;揺れと振動の心理学　金子書房.
徳田治子(2002).母親になることによる獲得と喪失－生涯発達の視点から－　家庭教育研究所紀要, **24**, 110-120.
徳田治子(2004).ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ;生涯発達の視点から 発達心理学研究, **15**, 13-26.
堤ちはる(2008).「授乳・離乳の支援ガイド」使用の実際　小児科診療, **71**, 965-971.
やまだようこ(2007 a).質的心理学の方法—語りをきく－　新曜社.
やまだようこ(2007 b).質的研究における対話的モデル構成法—多重の現実，ナラティヴ・テクスト，対話的省察性　質的心理学研究, **6**,179-194.